

- 1 日 時 平成27年10月8日（木） 午後3時～5時
- 2 場 所 兵庫県庁2号館2階 参与員室
- 3 議 題 「兵庫県環境学習環境教育基本方針」の改定について
- 4 出席者 会長 鈴木 胖 委員長 中瀬 勲 委員 今井 ひろこ
委員 岩木 啓子 委員 小川 雅由 委員 川井 浩史
委員 清野 未恵子 委員 嶽山 洋志 委員 名須川 知子
(※欠席者 委員 伴 智代 委員 三宅 康成)
＜参考人＞
義務教育課指導主事 日外 亮 高校教育課副課長 宮垣 寛
＜事務局＞
環境創造局長 濱西 喜生 環境政策課長 武田 雅和
環境学習参事 加嶋 幸彦

5 会議の概要

(1) 開会（午後3時）

議事に先立ち、環境創造局長から挨拶がなされた。

(2) 議事

「兵庫県環境学習環境教育基本方針」の改定について

兵庫県環境学習環境教育基本方針の改定について、事務局(環境学習参事)から説明した。

(3) 質疑・意見

(岩木委員)

大きく3点である。

まず、1点目は、9ページの「3 兵庫県における環境学習・教育の課題」の「(1) ふるさと意識を育み環境保全・創造への意識を高める環境学習・教育の実施」で、文が「人口減少」から始まっており、「人口減少」を根拠に環境学習の目的が「活動の担い手づくり」と、特化している感じがする。環境学習の目的は、「環境活動の担い手づくり」というよりは、個人が生活者として、あるいは企業人として、考え方を換え、行動化をし、ひいては社会システムの変革につなげ、その中から「活動の担い手」もでてくればよいという、総合的なものだと思う。よって、「担い手づくり」に収れんしてしまうような書き方はいかなものか。

2点目は、11ページの「IV 環境学習・教育の在り方」の「1 推進にあたっての基本的な考え方」だが、「① 環境倫理に根ざした教育—環境を大切にする価値観の醸成—」というこの項目自体は非常にいいが、この内容が、「命の感動を通して命を尊ぶ心を育むこ

と」ということで、「命の大切さ」という書き方をしているが、環境教育の場合の生命の大切さというのは、目の前の命、例えば、飼っている金魚の命がどうこうという捉え方というよりは、命のつながりやそれを育む環境のありようを実感するというような、生命の捉え方をしておかないといけないのではないか。環境教育としての命の捉え方がずれないような表現を考えてほしい。

次のページ「④ 社会とのかかわりを知る」で、内容が社会の現状の追認、「今の社会とこんな風に関わっている」ということを、知識として学ぶという書き方になっているが、どちらかという、自分たちの日々の暮らし方等が社会と関わっていることを視野に入れるということの方が大事だと思うので、環境価値を身につけることで、社会制度の変革までを視野に入れる、というような内容を少し盛り込んでいただくといい。

それから「⑤ 総合的な理解を促す」、これも重要だが、この項の1行目の最後から2行目にかけて「発展学習として」と書いてあるが、これを「発展学習として」と位置づけると、その発展以前のもものが別にあるということになる。だから、個別に並ぶのではなく、「総合的に」というのが大事だが、それを発展学習ではなく、「総合的に学ぶこと、そのものが大事である」と書かないといけないと思う。

それから、原則2の①、②、③、④、はいずれも大事なことだが、その書き方が、例えば、②の最初の1行に、現場、本物に触れ、環境について興味、関心を抱いた人々が、環境の基本的な事柄について学ぶことができるようになるというように、①を受けて②、②を受けて③、③を受けて④、というように、①、②、③、④の順番で学んでいく、という書き方になっているが、これもこの4つの要素が必要であるという書き方をしないと、必ずしもこの順番に学んでいくものではないと思う。ここでもその③のところに「発展的学習」と書いてあるが、「現場体験」、「基礎的学習」、「発展的学習」、「行動学習」とあるところは、①が「感じる」、②が「知る」、③が「考える」、④が「行動する」、と、そういう要素が必要ですよという書き方をすれば、環境学習として何が重要なのかをきちんと記述できると思う。

(中瀬委員長)

岩木委員のご指摘に対して異論があれば。

(川井委員)

異論でなく賛同。今、発言のあった11ページ「環境倫理」のところから、何を教えるというところで、「生物多様性」という言葉や考え方が入っていない。「生物多様性を理解する」とか「自然を保全する」とかが、最初にあってもいいのではないか。これは私の個人的な印象かも知れないが、人口がどんどん増えていったり、経済がまだ発展しているところで、どうやって環境保全するかという国際合意のためにあるような部分があり、さきほど意見のあった「人口減少していく」あるいは、「産業構造がかわっている」ようなところは、元々日本人が持っていた「自然を崇拝」というか「自然を大切にする」とか、「生物多様性を大事にする」というところから入った方が入りやすいのではないかと思う。

「倫理」以前に、そもそも我々が自然を大切にしていればそういうことにはならない訳で、「生物多様性の保全」とか、「自然、豊かな自然を守る」とか、「育てる」とか、「大事にする」というところから入った方が分かり易いのではないか。そのために生態系を、そ

の科学的な根拠として理解しないとイケないし、同時に人間関係のなかで環境保全するための倫理みたいなものが生まれてくると思う。そのあたりが、私は違和感を覚えたのでご検討いただきたい。

もう1つ。例えば、高校生ぐらいになると、単に学ぶというよりは、ある程度交流して意見交換するというのも出来る段階だと思う。そのことが「協働する」ことに繋がって行くのだと思うが、その部分を積極的に書いても良いのではないか。なぜかという、この資料の中で、今までの例がいくつか挙がっている。7ページの所に、例えば、兵庫県がこういうことをやっている。ということをご是非入れていただけたらどうか。

私自身が、兵庫県の高校に直接関係していて、よく知っているせいもあるが、高校生が、例えば、フォーラムみたいなことをやって、瀬戸内海沿岸の高校と交流をして、その環境問題を議論するようなことを実際プログラムでやっている。県立尼崎小田高校がSSH（スーパーサイエンスハイスクール）でやっているが、海の問題なんか特にそうだし、山も、あるいはさっきの熊の問題なんか、どこの熊だって話があったが、単純に県の中だけではなく、周辺の自治体の人たち、あるいは、学生同士で交流して意見交換をしないと、問題解決の道もなかなか見えて来ないと思う。そういう意味で、単に上から教えるのではなく、高校生同士、大学生同士で交流しながら意見交換していく、あるいは学んでいくようなことを、今後もっとやっていかないと広域的なことに対応は出来ないのではないかなと思う。

瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラムを、4～5年やっていて、SSHも何年間か続くので、そういうことを是非とも教育の一部としてやっていくことが、問題解決能力のある人材養成につながると思う。そういう意味でも単に学ぶだけでなく、意見交換をしながら一緒にやっていくのを、もっと早い時期から入れていただけたらどうか。

（中瀬委員長）

それは、中学校もできる。この間、岩槻先生がすごくおもしろい話をされていた。中学生や高校生の研究には、サマリーが全然無いけど、発想が良いと。

学者の発表は、サマリーはいっぱいやっているけれど、切り口はおもしろくないと言われていた。そういう雰囲気をごここへ少し書けばいいのでは。本当に僕らの仲間はサマリーのしすぎ。川井先生ご指摘の中学生、高校生の活動で、新鮮な切り口でやっていることを是非うまく書いていただけたらいい。

9ページのところは、「人口減少」から始まっている。それは、地域創生の資料に引っ張られたのではないか。あれは岩木委員がおっしゃたように、環境教育・学習から入り、その後少子高齢化の話をしするということ。

（名須川委員）

12ページでご指摘があったが、ご指摘どおり、この順番が定型的にならない方がいいと思うが、ある意味、循環しているのかなという部分だと思う。だから少し書きぶりを変えれば良いと思う。サイクルだとか、継続のプロセスとか、そうはいうものの、やはり発達段階が非常に重要で、まず、知識を得る前に「感じてほしい、感動してほしい。」それがベースにないと、活用できない。そんなことを思えば、ここは順番をとるかどうかな考えた所ではある。

(中瀬委員長)

まさに教育と学習が混じっている。兵庫県独自の方向性が現れている。そのあたりを事務局で上手に料理してほしい。まさに今のご意見を2つとも上手く混ぜ合わせてもらえれば、兵庫県の特性ある環境教育、学習になると思う。僕はフリーチョイスラーニングとか、フリーチョイスとか、ランダムアクセスとか言う。それを言えば、教育をまじめにやっている先生は怒られる。真剣にちゃんとやれと。その2つの葛藤を上手に表現してほしい。

(小川委員)

基本的に、前回は踏襲するところがあるが、「こころを育む」という、その「こころ」をストレートに、前回は、社会的な事件もあつたりしたので、「こころの教育」の延長で、「こころ」を前面に出していこうという背景はあつたと思う。やはり「こころ」という言葉と「環境倫理」という言葉と、「五感」とか、このあたりの言葉を十分に整理しないまま使っている。ここでもう一度「こころを育む」ことが前提にあつて、ことが進むのか、先ほどおっしゃったように、やはり「環境教育、環境学習」という環境の側面からの部分から入って行って、結果としてこころの醸成につながるのか、10年経つた中で、「こころ」に縛られるかどうかというところの議論が必要。倫理というと一定の基準とか、そういうところが前にぐつと出てしまうので、道徳教育の部分と、環境教育・環境学習との部分との整合や関連づけが難しい。今のことと絡めるとその話もいると思う。じゃあどっちにどうするかは、まだ大きな流れがあるので、1度ご意見聞いてからだと思う。

(中瀬委員長)

「こころ」という語を別の言葉に変えることは事務局は大丈夫か。教育委員会がやっている「こころの教育」との整合性はいいのか。その辺の整合性が要る。教育委員会がやっている「こころ」の使い方と、この環境学習(基本方針)でどう使うのか、その辺の整合を事務局でお願いしたい。

(小川委員)

これは細かい話で、資料2の「3」のところの「実施状況」の中で、「幼児期」という言葉がまだ残っているが、敢えて「幼児期」という言葉を使うのか。「乳幼児期」で統一するのであれば、2カ所ほどあつたが、統一したらといいと思う。

あと、ここは凄く難しいと思うが、都市と農村の交流による環境保全・創造活動の促進という県全体の二居住政策とか、そういった県特有の事柄があるが、例えば、県民にとって、これがなぜ必要なのか、とか、これをやることでどういうことにつながっていくのかって、たいしては、すつとつながらないと思う。都市と農村との交流が何を生み出すのかというところが、二居住で、できるだけ過疎地にも足場を持って都市の方々を暮らしてください、という話も以前あつたが、それは何のためにやるのかというところがやっぱりないと。単に「過疎地が疲弊するから」だけではだめだと思う。兵庫県の場合は、都市と農村の両側面を持っているので、両側面がつながることがどういうところに行くのか、例えば、「持続可能な社会」とか「意識を作る」とか、そういう何かのつながりの中に物事が展開できるような使い方が入ってくると面白いと思う。

あと、「防災」のところは、今回の中には入っていない。自然の、人間にとってのプラス

面かマイナス面を両方見るといふところの共生の意識というの、僕ら阪神・淡路大震災を経験したりして、「やはりそのいいとこどりでだめですよ」といふ、この反省を促されたと思ふ。そういう意味で、「自然と共生する」といふところの中に、マイナス面をどう受け入れるか、それがあつた意味、自分たちのふるさとの意味だと思ふ。神戸であれば、六甲山という怖い山があつたりとか。海側に住んでいれば当然、津波の問題とか。反対面から見れば自然があつたりといふことになる。その両方の視点を入れていくといふのがこれから重要になるので、ここのところを考え方の中に、やはり、「この兵庫県ならでは」のところ、その意識を、被災地として盛り込んでいくといふところがあるのかなと思ふ。

(中瀬委員長)

今、防災をキーワードにいただいた。

都市と農村の交流についてはどういふ風に表現したらよいか。

(清野委員)

篠山の子どもたちに源流の話をするときには、必ず下流のことも含めて話をする。源流にいてもあるので、都市と農村の住民の交感、交感といふのは「交わる感性」のことだが、交感を通じた環境保全・創造だとか、交流を通じて、防災のことも含めて、それぞれがそれぞれの地域に住んでいるといふことを感じあえるようなことといふのが交流の中に入ってくると、それぞれの地域で環境保全・創造活動が促進されるのかなと、今の話を聞いていて思つた。ただ、出会うだけじゃなくて、それぞれの地域の環境のことについて考えるといふ観点で。

(岩木委員)

今の話をお聞きしていると、要するに交流するとか、関わるといふことを通じて、環境に対して豊かな理解をするといふ関係。しかし、こういうところに書いてしまうと、交流が目的になり、交流のために環境教育を手段として使うといふニュアンスが漂うところが、たぶん一番の違和感だと思ふ。だから、色んな要素を入れることは大事だが、ここでまとめなければならないのは、環境学習、環境教育といふことなので、そのことを中心にしないといけないのではないか。今の話を聞いていて、まさにそういうことだなどと、交流することで、それが見えてくる。だから、そういう豊かな理解を促進する為の交流であり、いろいろな人が関わってそういう状況をより作り上げていくための協働。だからそっちが手段なのかなと。

(小川委員)

敢えて言うと、森・川・海とか、山・川・海といふじゃないですか。兵庫県の都市と農村のつながりといふのはまさにそこ。北も、南も。そうするとその浜辺に住んでいるいわゆる大都市圏は大都市圏だけで成り立っているのではなく、当然、向こう側であれば、篠山に源流があつて、ここに全てつながつていて、水も、防災的な側面も、栄養分も、瀬戸内海もそのことが問題になっているが、その意味でのつながりとしての都市と農村の関係を、お互いが理解して助け合わないと、トータルな豊かさがないと、それで、「瀬戸内法」も改正されるとなつていく訳で、そういう意味で、都市と農村がお互いに理解と促進が一体して、我々は生きていく、といふところの発想がこの中に散りばめられるとよいのではないか。

自分たちが、ここで平和に安全に暮らせているのは、奥山があって、奥山の人々が手付けられなかったら、都市も困ると。結局、自分たちに返ってくる、というように、トータルなつながりが意識できるような表現になればいいと思う。自分たちは、「普通に何も考えないで、ただ水道をひねれば水が出てくるが、この水はどこからきているのか」から、「この森は」という風に、農作物のことなど、色んなことにつながってくると思う。だから、「環境」とか、「自然のつながり」の側面をこういう前提として入れていった方が、わかりやすいと思う。

今日、資料をお持ちした。一つはうちの機関誌だが、機関誌の5・6ページに、西宮市でやっている環境教育、環境学習の取組を図にまとめて、つながりのキーワードを整理してみた。どうしても文章、箇条書きで書いていくと、その全部が平面的になってしまって、どの問題とどの問題がどのようにつながっていった、最終的にどの方向にいくのかというところを補完するのが、難しくなってくるので、出来たら一度、補完できるような形も作りながら項目を落としていくと、ここに書かれていることが、全体像としてわかってくる。これは、僕らがその当時考えて作ったつながりの図。今は今で変わっているが、こういうイメージも出来たら方針の中で、形にして、見たときに印象付くようなつながりが、印象付くようなことがあれば、この文章が読みやすくなると思った。参考まで。

(中瀬委員長)

今、凄くいいキーワード、「つながり」というキーワードをいただいた。先ほどの「こころ」の話、「倫理」の話とかなり共通している。都市と農村の交流というの、前の第1期のビジョンがこれをもっと挙げていた。たぶん事務局はこれに引っ張られたんだろう。あれはビジョンで都市と農村との交流でその前の総合計画で、週末生活圏構想というのを県が出していた。あれにも引っ張られたのだと思う。もうそれはそろそろ縁を切って、今、言っているように「つながり」ということで山・川・海、あるいは地域と地域の間という話をうまくやったらいい。

(名須川委員)

今の話に関連して、兵庫県はいろんな所がある。全国でも特殊な県だと思うが、私は加東市に住んでいて、仕事で神戸に出てくる。そんな時にいつも思うのは、それぞれの地域がそれぞれそれなりに、要は自分の地域が大好きで、地域の良さ、自然の良さをアピールすると、篠山に行ってみようかな、という気持ちになる。そんなことが県内に広がっていくというのがある。ベースは自分が住んでいるところでの暮らしということがあるが、そこを「すごくいいところだよ」とか「こういうところがいいところだよ」とか、五感で感じて「あのやっぱり住めば都」じゃないが。私も加東市に大学がなければ、加東市に住んでいないと思う。非常に不便だが、学術的には、良くて、その地域のよさも分かってくる。それをもってしてやっぱり交流するというのがないと、加東市に住んでるの？って馬鹿にされることがある。互いに同じ兵庫県にいるのだから、互いに理解することなのかなと、思いながら今、話を伺っていた。でも逆に言えば財産で。兵庫県の。

(中瀬委員長)

兵庫県は「地方創生」と言わず「地域創生」と言う。都市に対する地方、そんな考えは駄目だと、「地域」だと、知事と同じ意味のことを言っている。

(名須川委員)

もう1つ。私も防災のことが気になっている。やはり、あれだけの大変な経験だったが、ある意味凄い経験だったので、私は教育的な立場から、せめて地域の防災訓練を一緒にするということが大事だと思う。意外と幼・小・中・高校が連携して実施していない。やろうと思えばできるが。3年前の災害でも、中学校と小学校の連携がいい所は、中学生が小学生を連れたことで、全員が助かった。普段からの学校間の交流がなければ、互いにあの子どもたちはどうしているのだろう、という気持ちにはならない。意識的に連携していかないと、防災のことも考えられない。そういうことも県で推進して欲しいと思う。

その環境ということで、先ほどの負の遺産を有効に使うと意味合いで思う。それを兵庫教育大学附属で提案してみた。それが一緒にやっていない、「それぞれやっていますから」という言い方を。小学校、中学校と別々に。それじゃ駄目なんですというところ。

(中瀬委員長)

今までのところで、結構いいキーワードが出た。「つながり」というキーワードがだいぶ出ているので、それをどううまく組み込んでいくか。防災教育は関東のほうを見るとよい。小学生は全員、防災ずきんを持っている。この間、東京に引っ越した、私の孫が、防災ずきんをかぶった写真を送ってきた。どうも、子ども全員に防災ずきんを配るとのこと。少し関東の方をみると、どんなことをやっているか、見えるかもしれない。

(清野委員)

今の点で、素案の概要(資料2)のところで、「IV 環境学習・教育の在り方」の「③防災教育との連携」で、阪神・淡路大震災だけでなく、丹波や佐用の大水害のことも、入れておかなければいけないと思う。

あと、先ほどの「つながり」ということで、「3 ライフステージに応じた環境学習・教育の推進」というところ、兵庫県がずっとやっていることだと思うが、そろそろ「ピアサポート」とかの言葉を入れてもいいのかなと思う。

(中瀬委員長)

そういうのが今、主流になっている。この地震だけではだめ。水害のことも入れることが必要。

(川井委員)

最後のところで、「環境学習・教育拠点施設のネットワーク形成」と書いてあるが、これはあくまでネットワーク形成であって、既存のものをいかに活かすか。新たに作るのは、お金の問題で難しいので全く考えないということなのか。つまり、新たな施設整備ということも、もう少しあってもいいのではないかという気がする。せめて、基本方針としては。というのは、例えば、海だと「母と子の島」があるが、県が直接サポートするというよりは民間に管理が回ったり、あるいは山の施設も民間のものを使うとか。最近、直接、自分の所で場をつくるという考え方があまりなくなっているんだと思う。だけど、やはり先ほどもあった交流をすとか、安全に色んなことをやる。特に、海でやっている、安全に活動するというのが、だんだん難しくなっていて、安全な場所がないとできない。皆さんもよくご存じだが、阪神間だとそういう施設があって、海辺で何かが出来るんだとか。あるいは、日本海だったら、竹野で何とかできるとかというのがるので、施設を整備し

ていく自体は続けなければならないし、重要なんじゃないかと思う。だから、ネットワークで既存のものを活用するのは、確かに大事だと思うが、必要なものはどんどん整備していくと挙げていただいた方がいいのではないかと思った。

(中瀬委員長)

今の先生のお話、兵庫県の方は、財政的に厳しく予算の削減ばかりで、私もふくめて萎縮している。そこで、その時に何を考えなければならないかという、最近の世界的な話題だが、今、使われてない施設を有効活用するのにどうするのか、という話。ドイツに行ったら、昔の炭鉱の設備をそのまま環境教育の施設にする。だから、新設といっても、既存の高度経済成長の時に作って不要になった施設をどうリバイタルするか。いつも言っているが、ニューヨークに一番名所のハイラインという遊歩道があるが、ここは、鉄道の高架跡地にただ草を生やしただけ。それが観光名所になっている。今、川井先生の言われた話を兵庫県下で。今後人口減が進み、学校が沢山要らなくなる。例えば、体育館が不要になったり、そんなことがいっぱい出てくる。それをもう一回、話を入れかえするのかという視点でいけば、結構、今の話いける。よりよい有効な施策になる。そういうのを環境面から是非やっていただいたらいい。

(川井委員)

うまくいっている例は、わりとあると思う。例えば、尼崎の運河に水質改善の実験施設があり、環境教育の拠点になっている。そこは小・中・高校がみんな参加している。だから、環境教育のために作ろうとしなくても、うまく相乗りできるものも沢山あると思うので、そういう整備も必要であると、方針だけでもぜひ書いていただきたいと思う。

(小川委員)

ちなみに、今、甲子園浜の自然環境センターは、元々、競輪の事務組合の研修所。あれを改造して海辺の環境学習の拠点にしたり、今、我々のいる阪急西宮北口の「環境学習サポートセンター」といって、元々、コープこうべのフードコート改造して、水族館に変えたりしている。お金のない中であるものをどう活かしていくのかという所でやれば、市町村レベルでも応用できる施設はかなりあるという気はする。

(中瀬委員長)

その話は、施策全般にいえる話。

(小川委員)

話が変わるが、素案の8ページ。県の環境基本計画の時にも色々意見したが、「(2) 地域の特徴を活かした取組の推進」の表で、県民局の事業しか載っていない。そうすると、県民局の取組みであって、そのエリアの取組にはならないので、「県内各地域の特徴的な取組」にするのであれば、県民局以外に、市町がやっているものも例示して入れるとか、あと、教育委員会と知事部局の取組も並列するとか、その辺のカテゴリの整理をした方がよい。結局、県民局で予算が付いてる分が載っているという話で終わってしまうと、「これしかやってないの」という話にしかならない。県でまとめられる全体像としては少しもったいないのではないかな。県民局でやるところ、市町村でやるところ、それは分けても良いと思うが、もう少し膨らまして取組が幅広く見えるようにした方がいいかなと思う。

それと、人口減少と少子高齢化の話。今、現実的には、凄くマイナスイメージの方が強

いが、上り調子の高度経済成長で作ってきた負の遺産を、人口がマイナスする減少化傾向の中で、もう一度とり戻して新しい価値感に基づく県土づくりというような観点から、先ほどの山・川・海のつながりであるとか、大都市の循環であるとか、そういう自立循環型の社会形成というイメージをこれから逆に作っていける要素が高まっていくわけなので、そこは「人口減少」、「少子高齢化」がマイナスに向かう、というイメージだけで書くのではなくて、むしろ、高度経済成長と人口急増化時代のマイナス要因を「このように改善できるチャンスが来た」という書きぶりも、していただいてもいいのかなど、全面に言う必要はまだないが、そういう方向に向かうのが、県の持続可能な地域づくりというプランに込められている要素でもいいのかなと思う。ちょっとここは気になったところで、検討していただきたい。

以前、県の環境基本計画の改定をする際、各市町で策定している基本計画のヒアリングやっていた。あそこに事業が全部載っていると思う。そこから抽出してもらってもいいと思う。

(中瀬委員長)

「こころ」、「倫理」、「五感」というキーワードから「つながり」、「防災」というキーワードが出てきて、ちょうど20世紀の負の遺産を、21世紀にどう再活性化していくのか、という話がずっと続いている。非常にいい話。前向きな話。

(嶽山委員)

「ネットワーク形成」や「つながり」という話で、分野の「つながり」も大事だと思う。先ほどの交流の話もそうだったが、どこかに部分的にでもそういった表現があればいいと思う。方針全体は、環境学習・教育だが、具体的な施策を考えたときに「これも環境学習・教育なのか」という読み方ができるメニューになれば良いなと思っている。先ほど、清野委員が言われた「交流」とも何とか組み込めないかと思った。そういう意味では、大学のインターンシップなんかも、長期的なインターンシップで地域に関わっていき、のちにそこに住むようになる学生も出て来たりとかもする。インターンシップはただのインターンシップではなく「長期のインターンシップ」とするとよいだろう。

また「こどもの貧困」という時代背景も避けることができないと思う。子どもたちに食事を提供するNPOも出てきているが、そういう子どもたちにも環境学習が行き届くようにしたく、児童福祉施設をネットワークに入れることも考えたい。

(中瀬委員長)

今まで環境学習・教育とは、意識的に結びつけなかった色々な施設群のネットワーク化をどう図っていくかということ。

(小川委員)

僕の個人的な考え方でいうと、環境学習・教育は、基本的には人権教育がしっかりと確立できていないと、そこへつながっていかないと思う。

人と人との関係の中で、環境問題が発生するので、人と人の繋がりは根幹のところ。だから、保育所は、年中の子どもが年少の子ども面倒を見たり、年長さんが年中さんの面倒を見たりとか、その「つながり」が鍵になるし、いわゆる社会的に弱者となる立場の人たちとの関わりも、そこに目を向かない中で、鳥はかわいいねと言ってもちょっと困る。

その中で、「こころ」というところの倫理に繋がっていくような幅を持たせたものが必要だと思う。施設間だけではなくて発想の中に。

(中瀬委員長)

昨日、姫路で、「生物多様性戦略」の委員会をやっていたが、姫路の生物多様性の第1章は、和食の写真を入れている。「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶も。その生態系サービスの話をし、今日の会議の冒頭で言われていた「共生」とか。我々、日本人が持っている自然の思想をしっかりと表明しようということで、和食と箸を置いて、神様からの贈り物を「いただきます」と。そういう話をまず最初から行こうかと。ひょっとしてそんな話までは基本方針に書けないけれども、日本独特の我々のもっている基礎的な概念なんかも大事な。

(小川委員)

シニアの方の話。17ページだが、「シニア世代」ということで、世代ごとに書いてる中で、昔の暮らしや節約の精神とか、環境の共生とか、先ほどから出ている水害の問題とか、やはり年配者だからこそ経験したことはいっぱいある。これは、「環境の暮らし」とかという地域の取り組みだけではなく、防災的な側面も。防災的な側面って何かというと、「昔の人はどこに住んでたんだろう」という居住場所とか、「危ないところには住んでなかったはずだ」とか。地理的な環境が、結局、居住の安全性とも繋がっている。

そういうことを昔の人は、「伝承」という形で、伝えてきていたはずのものが、いつの間にか途絶えてしまったということ、阪神・淡路大震災の時にすごく感じた。だから、「街の語り部」をやっているが、その中に、「シニア」の役割として、シニアは、前の世代から引き継いでいるものがあるので、それを次の世代に伝えていく。伝えるというのは「伝承」という言葉の方がはっきりと意思があっていい。単に自分が経験したことを相手に言ってあげるだけではなく、「伝える義務がある」という意味でも、「伝承」という言葉で、ここにはシニアの役割を入れた方がいいのかな。その時に、今、言ったような、地域の歴史や街の変遷。意外とそういうことが防災面ではものすごく大きな意味を持っているし、今、僕が一番興味を持っているのは、地理に対する教育と環境教育があまりにも繋がっていないとか。それが結局、防災的な側面や都市計画、まちづくりに全く反映できていない。だから、時間軸で温暖化する時期、寒冷化する時期、街ができる時期と出来ない時期、水害でやられる時期、とか色んなものが全部かぶっている。そういうことをひっくるめて、さっき言ったように、自然と共生するというのは、長い時間軸で、やってはいけないことを過去から学んで、それを将来に伝えていく、という意味での、シニアの役割というものはあるんじゃないかと思う。

だから、1つは、この「シニア世代」にそういった側面もうまく入れて、やっぱりトータルな語り部であってほしい。

もう1つは、学校で学ぶ「地理」が、地形を成す基本として勉強しないといけないのに、僕の印象では、中学校の社会科の地理は、覚えるだけの授業だったような気がして、印象が一番悪い。ところが、大人になって、街で生きてみると、その地理が分かっていないとか、自分の住んでいるところの標高も分かっていない。その土地の歴史も分かっていない。そんな中で、被害に会うのは結局自分だということ。やはりもっと身近な地理を、中学

校とかでしっかり指導していただいて、その積み上げが高度な環境問題とか、防災とかにもつながっていくと思う。環境というと、理科、社会科、家庭科、保健までいけばいいが。やはりその中に、我々が抜けていたと思う要素を重点化して入れておかないといけないと思う。

小学校3年生か4年生で「私たちの郷土」というのがあるが、中学校でもう1回「郷土学習」がある。それがほとんど飛んでしまっている。だから、中学校で街を歩いて、自分たちの地域を理解する、ということができていると、また違うのではないかなと思う。環境教育の中にそういう要素も入れていただきたいなと思う。

(中瀬委員長)

亡くなられた甲南大学の谷口先生が、「クロスカリキュラム」というのをものすごく言われていた。

(名須川委員)

小川委員の意見に賛成だが、窓口は環境教育だけど実は、歴史と文化、その中で暮らしてきた人ということで、15ページの「世代間の継続性や多世代交流」を、「(7)シニア世代」の下にもう1回繰り返して記載してもいいかなと思う。最初の3行のところを繰り返しても。多世代が会うことの意味ってすごく大きいと思う。

だから、まずは、「この地域が好き」、「この場所が好き」、だけど、「歴史的にはこういうことがあったんだ」とかいうように地史学というのか。自分のアイデンティティも作られていく。そこは、すごく大切な最終目標かな、というふうに思う。その人の、地域の中で育まれる人格形成というのかな。その要になるのがシニア世代の人、これから特に高齢化の時代の良さ。多くの人がいるので話も聞けるし、手伝ってもらえる。別の観点で言うと、私、大学で「子育て支援ルーム」をやっていると、前回言ったが、あれは、お母さんと子どもをサポートするだけではない。実は多世代交流を狙っていて、子どもを巡って、いろんな大人や学生、シニア世代もやっぱり子どもを見るとにこやかな顔になる。私は、「バアバ」の世代だと思うが、こういうところで人と人との「つながり」を作りたい。たぶん、子どもが「つなげて」くれるんだろうな。ある意味「いのち」。「いのち」を継続。だから、おじいちゃんやおばあちゃんも、自分の孫だけじゃなく入ってもらいたいなあとと思う。地域づくりにつながるのかなあ、と思うので、そういうのがこの辺の15～17ページのイメージであればいいなと思う。同じ意見。

(川井委員)

今のところで、違和感があったのは、16～17ページの社会人世代、シニア世代というのが環境教育の対象であるのかどうか。ずっと前にも成人期の環境学習・教育の推進というようになっていたので、前からそうなのかもしれないが。大学までは教育課程があるので、教育という言葉が使われても特に抵抗はないが、社会人が受け取る側、聞く側として、環境教育あるいは学習の対象として書かれていることに対して、抵抗を持たないのかなあということがちょっと気になった。それはもちろん社会人の常識として、あるいは責任として、こういうことを知っておいて欲しいという部分で、中身があるのは分かるのですが、「その教育を新たに作る」というふうに言われるのもちょっとなんか。特に、私もシニア世代に入ると思うが、「高齢者は」のところは「役割として考えられる」と書かれてい

る。つまり、「もう使う相手として、お願いします」ではなくて、「この役割を持って、あんたたちはこれをしなさい」というような書き方になっているので、それが、前のところとトーンが違う。「伝承的なことを期待される」とか、それなら分かるが、役割として書かれるとちょっと違うなど。高齢者の立場で考えると。定型として決まっているのだったら仕方がないと思うが。「社会人世代」「シニア世代」の書きぶりは、変えた方がいいのではないかというのが1つ。

もう1つは、さっきから思っていたが、社会人世代に期待することとして、大学生、特に小・中・高、せめて、乳幼児、小・中ぐらいの人たちを自然体験や環境学習の場に接する機会をぜひ作ってほしい。ここで書いてあるのは、子どもが学校で習ってきたら、それを取り入れるというようなことしか書いていない。大人がもっと積極的に子どもに接する機会を作らなければならないと思う。だから、そこが社会人世代に期待されているのであって、大人はそもそも社会人の責任として、「こういうことはしなきゃいけない」ということがあるのだと思う。それは、「教えられてどうこう」ではなく、社会人としての責任として、次世代の人たちの環境意識を高めることに使うか、あるいは積極的に動くかという話なんじゃないかなというのが、「(6) 社会人世代」で思ったこと。

ここでさっきのことに戻るが、「高齢者は」というのと「社会人世代」というのが切り分けられると、どこからがシニアで、どこからが社会人か、引っかかる。高齢者も社会人である人は沢山いるし、80歳でもまだ現職で働いている人は当然いるわけで、このところは書き方をもう少し気を付けた方がいいのではないかなと思う。

(中瀬委員長)

この書き方は、前の時にすごくもめた。前期高齢者、後期高齢者、すごく細分化した。それを丸めてこのようになったのかどうか。

(川井委員)

でも、何しろここでスパッと個人的には切ってしまうでもいい。大学生までは教育で、社会人世代以降は、環境教育への貢献であるべきなんじゃないかなと思う。

(中瀬委員長)

(6)として(6)の①、②として、「例えば」、でいったらいい。

(清野委員)

前回、生涯学習の観点で、社会人になっても学ぶという姿勢がある場合に、それに対して社会人世代に学習という考え方を入れる必要があるんじゃないかという指摘をさせていただいたような気がするが。

(川井委員)

それは、学びたいと言って学ぶのであって。

(中瀬委員長)

プレイヤーとして活動するのと、学習を受ける側であること、その議論をした。

(清野委員)

私もお話を聞いて同じように思ったので、教育の推進から、それを支えるものの役割とかという、別の欄が入ってというのがいいのかな。

(小川委員)

大きくは世代の役割。世代間の役割がどうなのかというあたり。

(中瀬委員長)

発言のタイミングを失ってしまったが、「シニア世代」からいろんな話を聞いて、「伝承」とか「語り部」とかいう議論。そのとおりだと思う。あの話を聞いた時に、NHKの番組、「ブラタモリ」を思い出した。ある時、日本都市計画学会の総会に「ブラタモリ」を基調講演してもらおうと。ところが、タモリが断ってしまったので、その話はなくなった。そういう乗りをうまいこと書けたらいい。あれはまさに土地の歴史、地理を読んで、高齢者からいっぱいヒアリングしながらやっている。

(小川委員)

阪神・淡路大震災後に作ったのが、「街の語り部養成」。「セーフティ・エコガイド」を作った。当時、立命館大学の高橋学先生が、地形図の微地形というのを出されて、20cmの高低差が土地の履歴を物語っていると。ずっと見た時に、江戸時代の川や平安時代の海、それと被害が全部つながって、死者のところまで全部つながっている。そういう発想が、今までの環境には全く無かった。改めて、さっき言ったように、「自然との共生」というのは、都合の良いものと悪いもの、両方を受け入れることが出来る素養を持たないと駄目。自分の住んでいる地域の地理的な環境をしっかりと理解できるか、といえは全然出来ていない。みんな小さい高低差を意識せず、普通に街の中を自転車で走っていて、少しの坂を坂だと思っていない。

でも、そこは平安時代の海岸線。意外と長く住んでる60歳、70歳、80歳の人ですら、そういうことを客観的な事柄として整理出来ていない。そういう整理をしていくことが、地域を理解することだと思って、今、ホームページを作ったりいろんなことやっている。「地域理解」という意味で。やはり、地域を愛するためには、「地域理解」ということは絶対不可欠な要素で、「地域理解」をするためには、小さい頃から小学校3年生や4年生の郷土の歴史から積み上げていって、自分で学んで、自分の意識の中に落とし込んでいくことが一番必要だと思うので、ほんとに「ブラタモリ」をね。どの地域でもやって、それを本当は年配の方がリードして子どもたちに話してくれて、お母さんと子どもが一緒になって「あーそうだったのか」とびっくりするような体験が次から次へ「つながる」ので、あんまり僕は温暖化とかゴミ減量とかを、おじいちゃんやおばあちゃんから聞かしてもらったことはない。地域のことを話してくれるような人材として、各小学校区にきっちり配置してくれることを願います。

(中瀬委員長)

僕もずっと「地域理解」と言っている。「地域理解」をやろうとしている学問がない。「地域理解学」とは言わないが、「地域理解」を促進するための何かをやってみたら。その理解する人がどんな人なんかというのも先ほどの「シニア世代」かもしれない。そういうキーワードを入れると、IVは結構うまくいくような感じ。もし、事務局内で問題なかったら「地域理解」というキーワードを盛り込むことも一度ぜひ議論してほしい。

(小川委員)

冒頭で「地域力」というのがありますから。

(今井委員)

ようやく、少しついていける話題が出てきたのですが、ジオパークを私たちの地域でやっていますが、それってまさに先ほどからずっとおっしゃってる地形・地域風土の暮らしというのがテーマになっていて、他のところはやってなかったの？とこっちは驚く。なぜ、豊岡も水害が起きたかというところとか、どこで地震があっても、豊岡だけがいつも震度が1～2大きい。東京で地震があっても、どうして豊岡だけ揺れているのだろう。沼地で、その砂の層だけでも50～60mぐらいあって。だから、まるで豆腐の上にも家を建てているんだというふうに、子どもたちもちゃんと理解して。だから、地震があっても震度が高い。では、この地域ってなぜ、そんな堆積物ができるようになったのだろうというところで、玄武洞の話が出てきて、今、やっと5年経って、環境学習の中にジオパークの理念というのが入ってきた。その時の小学校5・6年生が高校になり、豊岡高校のスーパーサイエンスハイスクールで、こういうことを海外にも発信。そして、ギリシャのレスポスジオパークとも交流してそこでも発表した。この間も「アジア太平洋ネットジオパーク会議」が豊岡と鳥取で開催された時も、高校生が、自分たちの地域の地理や暮らしとかについて、英語で発表したことがあった。それを大人も見ているので、その地域のガイドさんというのか、その地域を語る人、「この土地はなぜちょっとだけ坂があるのかといったら、海の境目だった。」とかいう話が出る人が増えてきているので、ジオパークの活動も例に入れていただくといいと思う。ジオパークの考え方や学習の仕方はいくらでも真似してもらってもいい。佐用町の議員さんも「考え方がとてもすばらしい」とこちらに視察に来られた。地形、地質、風土、人々の暮らしというところを、地域活性に使っていいのですか？って。いくらでも学習してもらって、経済活動にのせてもらえれば、Iターンもしてくる、という話で盛り上がったので、そういうところもどこかに例として入れていただくと、参考にされる先生が出てくる。総合学習として、ジオパークを取り入れているので、同じような考え方でされると、きっと地域が好きになる方が出てくると思う。

(局長)

ジオパークで地形の話が出たが、実は小川委員が先ほど言われた「地形」とか「地質」学者というのは、世界的に非常に減っている。

一番最初に何をやるのか、といえば「町歩き」。過疎地域。まず、歩いてからしか始めない。それをやったのが、実は震災の時に活躍したコンサルの連中。その地域はなぜ震災になったか。書きぶりについてはこちらに任せていただいて、そういうことはちょっと書いていきたいなとは思っている。

先ほどからの意見、十分議論いただけると思っていない部分もあり、これはまだまだたたき台なので、10年前に書いた部分が相当残っている部分があって、今、ご意見としていただいた部分は、どこまで書けるか相当難しい宿題をいただいているが、今、いただいた意見は、そのまま汎用させていただきたいと思っている。ジオパークも含めて。

(小川委員)

直接、ここには出てこないが、自然学校。自然学校が、名前は自然学校だけど、本当に自然を学び、環境を学ぶプログラムになっているのかどうか。というところを、実はチェックしないといけないじゃないかなあと思っている。というのは、もう7年もやっている

ので。自然学校に来るリーダーの資質の問題、学校の先生との役割分担の問題、4泊5日
する中で構成されるメニューの劣化もあり、本当はこれが環境学習として体験的な学びの
エッセンスを、ぎゅっと入れ込んだものであればすごいが、残念ながらそこに落とし込んで
いくための気質を持ったリーダーは、現実には教育できない。そうすると、そろそろ転
機が来ているだろうと思われるので、環境学習の中にあえて、入れ込んででもやっぱり質
をあげていくというか。残念ながら未だにあまごの話とか。つかみどりとか。びっくりす
るようなものが、まだ、だいぶあったりして、もうそろそろいいかなあ、と思う。そうい
う意味で、都市と農村との暮らしの比較とか、米作りとか、いろんな学びの要素があるが。
そこがきっちり教育の中に続けられて、自然学校が意味を持つので、今回の基本方針の
中に、そういう要素も入れていただけたら、今、ある物の中でかなり対応できるものも出
てくるのかなと。

(中瀬委員長)

たぶん、義務教育課の皆さん方も問題意識を持っている。ところが、それを先生一人で
するのか、地域のNPO、地域の人々とやるのか、そこらへんを誰かが上手に橋渡しするよ
う。そんな仕組みをここで今のご意見に乗っ取って提案できたら、たぶん先生方は必死で
4泊5日間。プログラムを作るのだけでも大変ではないか。それを応援できるような仕組
み。ぜひ、その辺はうまく前向きに。

(小川委員)

西宮市立の小学校では、環境教育担当が各学校に1人いる。中学校もいるかな。ただ、
残念ながら、小学3年生の環境体験事業を受け持つ若い先生たちには、地域のことを十分
に理解していない方も多く、自然体験も少ない人が多い。

兵庫県の場合は、5年生、3年生という核になる学年があるので、継続的な環境学習の
しくみを作ることができると思う。ただ、それを環境学習計画の中で位置付けるところま
でやれば、ここに書かれていた、「各学校に一人は環境教育を担ってくれる先生を」という
ことも形になっていくのではないかなと思う。

(今井委員)

自然学校について、「研修センター」のような施設のあるところは、それなりにきっちり
したプログラムを持っているが、私のところのように民宿を使って分宿でやっているよう
なところは、おじいちゃんとおばあちゃんの出来る範囲のものしか出来ない。私も、今は、
スノーケリングとか、磯観察とか、環境学習の要素を入れたものをやっているが、おばあ
ちゃんたちがやるものって「みりんぼし」とか、何かちょっと板を焼いて、そこに字を書
くとか。それが何の学習になるのですか？と私が言って、おばあちゃんには怒られたが……。
そういう核になる施設があるところはいいが、施設のない地域でも結構、受け入れている
ところがあるので、そういうところに対して、資料2の人材育成やネットワーク形成とい
うところが、重要になってくるのかなあと思う。おじいちゃんやおばあちゃんとか、私の
ところで自然学校に関わっている方は、平均年齢は70歳を超えている。もう5年もした
ら、環境教育や自然学校を受け入れられないんじゃないかなと思っているくらい、ずっと
危惧している。そうすると、集落全体の士気が落ちてしまうので、私はできるだけ手伝
ってあげたいと思っている。そういうところに、例えば大学生のインターンの派遣や、イン

ターンシップとか、学校の先生になりたいけど、まだ慣れない先生の学習の場、教育の場という活用とか。他の地域からも支援される。今、リーダーも引退された60代後半の人が、頑張ってくれている。その方にはあと20年ぐらいは頑張してほしいが、そうはいかないと思う。もうそろそろ世代交代ということも。この中に自然学校の人材の世代交代、あるいはプログラム自体の世代交代とかも考えていけたらなあと思う。

(小川委員)

今の、「みりん干し」の体験は、それすごく大事なこと。

(今井委員)

みりん干しでもね、魚を解体してそこに何があるとかね。ここに胃があるとかね。あればいいんですけど。

(中瀬委員長)

逆にセンター施設には、洗濯機があって、自動販売機がある。それで、何が自然学校かって、僕は言いたい。

(小川委員)

生活の中で、魚の鱗をとって下ろす。ということが普通のおじいちゃんやおばあちゃんなら出来る。家に帰ったらできないじゃないですか。それは、生活の中の技術。

(局長)

擁護するわけではないが、教育委員会が始めた自然学校で全国的に何から始まったかといったら、農業体験。要は都市住民というか、今の団塊の世代の第2世代が地域をもっていないので、そこを体験させるというのが大きい目標の一つ。名前が自然学校だが。環境学習は環境学習でやり、農村体験は農村体験ということでそれは意味がある。

(今井委員)

「おいしかった」しか感想がない。たぶん伝えきれていない。

(中瀬委員長)

私の奥さんが赤ペン先生やっているが、赤ペン先生をやっていると、僕に「また兵庫の子やわ」って。夏休みの感想、自然学校。全員書いている。そういう意味で今言っていること突っ込んだらものすごいよくなると思う。兵庫の子、全員自然学校。そういう意味では結構浸透してきているので、今言っているような中身をさらに充実させて。

(嶽山委員)

県立大学の理系に進んでいる学生に同じように聞いても自然学校と答える。すごいなと思った。

(清野委員)

アイデアだが、「五感で学ぶ場づくり」という話で、前回まで「いいですね」と言っていたが、今までの話を聞いて、「歩いて」というのも入れて「六感で学ぶ」という。歩くというのがすごく重要だなと思って、歩いてこそ地理とか分かるんじゃないか、風とかにおいとか。なので、その「歩いて」を入れてみてはどうかと話を聞いていて思った。

(中瀬委員長)

ここで、ちょっとだけまとめてみると、キーワードで、一番最初から「知恵」とか「伝承」「シニア」「語り部」「地理」とかいろいろ出てきた。「こころ」「倫理」という議題から

少しキーワードを変えてみたらどうか、という話。「地域理解」の話が出てきて、キーワードが「つながり」「防災」。このあたり、結構、議論していただいた。

それと、各世代毎の役割で、プレイヤーとしてやるのか受講者としてやるのかしっかりと書き分けしないとイケない。一番最初、岩木委員が言われた、9ページのふるさと意識を育み…のところで、人口減少から始まっているのがどうか、とか。そのあたりをうまく書き分けしていただきたいということと、その時に、「いのちの大切さ…」が11ページであったと思うが、「①環境倫理…」これを何とかしてという話があった。この時に僕、聞いていたが、岩槻先生が「食物の今日一日の生き物のつながり」という絵を描いている。魚を食べて、お米を食べて、そういう繋がりのおいゆる今の時点での生き物の繋がりを、1つ書いておられて、もう1つは36億年の生き物の進化の絵を描いておられた。その2つを使って、生物多様性の重要性。今ある種は36億年の進化の過程でこれだけの種ができたから、これを絶滅させることは36億年の歴史を潰すんだ、という1つの歴史的な流れを多様性の大事さを言われて、今の世界で、あなた、朝、何を食べてきたのか、という話から始まって、今の我々の繋がりの話をされた。そんな話をいのちの大切さの代わりぐらいに、生き物の共生というかなんかそんな形でちょっと入れられたら。ただこれは県のいろんな報告書、今言った図2枚は「生物多様性戦略」でも使っていたと思うので、メインに使われなくても結構なので、参考で使っていただいたらいいかなという感じがする。

それから、乳幼児期をぜひ入れてほしい。このとき、僕が大事だと思うのは、ただ単にハードを作るだけではなくて、それに関わる人材をどうしていくのかということ。たぶん今まで誰もが出したことがないチャレンジになる。ハイハイしている子どもたちを公園とか屋外で、誰もやっていませんので。そこらへんをどんなふうにこれからやっていかれるのかということ、公園とか環境とかいろんな関連分野で教育委員会も含めて議論していただけたらいいなと思っている。

最後は「地域理解」の話。僕は丹波の森公苑の会報でいっぱい書いているので、また森公苑の会報取り寄せてほしい。小川委員の意見と一緒にしてもらって「地域理解」というのを、ぜひここに入れていただいたら、結構おもしろい話になるんじゃないかなと。僕は丹波新聞の記者を、地域密着型のローカルな新聞社の記者の方を地域理解の最先端やっている人だと褒めてあげたら、丹波新聞が結構喜んでおられた。そういううまい連携もいけるかなという感じ。

では、これで鈴木先生に感想をいただきたい。

(鈴木会長)

それぞれのご意見はもつともだが、今、新しく環境学習をするという一番基本的な目的は、地球上における人間の存在というようなことがどういう意味を持っているのか、その議論が全然出てこなかった。環境を守っていくのに、とても大事なことは、今のライフスタイルや人間活動というのが地球の環境容量を超えて、環境破壊を起こしているということ。それが現象となって地球温暖化の問題とか、それから改めて生物多様性がどうなっているかということまで問題を考えていかなければならない。どなたか、地球環境問題は関係ないと言われたが、根源は、我々が抱えていて、将来に繋がる環境問題、温暖化問題。それによって災害も起きるし、生物多様性も破壊されつつある、その一方では、日本のよ

うな豊かな社会と違って、貧困に苦しむ多くの人があると、地球の環境をどう守るかということをよく考えないといけないというのが国連なんかで言われていること。そういう視点あまり入っていないところがある。教育に関しても色んな意見があったが、基本的に乳幼児から、というのは大変いいこと。小学生・中学生くらいまではやっぱりなんといっても五感。「歩く」を入れるのかどうかは別として。そういうものに触れながら、環境を学ぶということは重要なこと。高校生になると、少し主体的に自分が取り組んでいくということを考えることになる。「こころを育む」は逆で、自然というのが分かって、そこから自然をどう見るかということが育まれてくる。暮らし、社会に至っては、「こころ」よりは、今の社会のエネルギー浪費型とか、エネルギーの無駄使いは社会構造自身の問題。そうすると、実は大学生にはもっと総合的にそういう問題を教える必要がある。社会人世代については、自分らが立派に言えるほどのことをやってきたかということ、全然そうではない。社会人世代は、ここまで世の中を引っ張ってきて、その活動の結果が今の環境問題になっている。時々、地球環境問題の講演をするが、全然分かっておられないという気がする。例えば、地球温暖化の問題というのはどこから来たかっていったら、CO₂の発生、大気への使い捨て。いわゆる垂れ流し。CO₂の垂れ流しの原因は、今の社会を支えている、化石燃料を使用すること、それが原点。ということは、今の人間活動についていうと、化石燃料を使って、CO₂を垂れ流して、大気に出していくこと自体、許されない時代。でも我々は、今のやりかたは当たり前だと思っている。本来、この時代になり、化石燃料を使ってはいけないような時代に入っている。そういう大きな流れというのが環境と非常に関わっている。そんなことは、社会人にはあまり通じない。多くの人はどういう答えを持っているかということ、分かっていると言う人はまだまし。温暖化なんて起こってないという発言がアメリカでもよくある。そんな人は結構いて、我々エンジニアの中でもそういうことを面と向かって、僕も反論されたこともある。それぐらいいい加減。だから、基本的なところの問題意識というのは、持ってもらわないと困る。社会人にいろいろ伝承しようと言っても、その根本的なところがずれているのではないかと、そんなことを感じる。

そういう意味で、乳幼児から高校生くらいまでは、いろいろ皆さんからいただいているような意見を入れるし、先代の知恵とかそういうものを入れると同時に、ふるさとへの愛着を育むような環境学習・教育を推進というようなテーマはいいと思う。

しかし、社会人世代、シニア世代については、もうちょっと子や孫などとともに実践し、伝えるという場合に、人間と地球、あるいは身の回りの環境との関係をよく理解してもらわないと、次に語れないんじゃないかと思う。身近な環境で「ああだった」「こうだった」と言っても、世の中がすっかり変わっている。今、世界中でこういう環境問題になっている。そういうことで社会人世代、シニア世代を教育し、納得をしてもらうことが必要なのだが、世の中結構ずれている。そういう時代に入ってしまったという気がする。そういう意味では、環境教育の在り方もどっちかということと中学生くらいは五感に基づくのが一番大事だと思う。そういう意味では、都市と農村の関わりを強く持つこと。時間があるときには、今や都市にいる人が大部分だから、地方へ出かけていろいろな体験するというのは非常に重要だと思う。そんなことを感じた。

閉会（午後5時）